



参加型調査

**キビタキの調査をはじめます！
まずは初認から。**

高木 憲太郎

暖かな日が増えてだいぶ春めいてきました。これからの季節、留鳥も繁殖に向けて活発になり、夏鳥たちも次々に渡ってきます。今回は、東南アジアで越冬し、4月ごろ日本に渡ってくるキビタキを対象に調査を企画しました。この鳥は渡りの時期は市街地でも見られ、5～7月にかけて平地から山地の広葉樹林で繁殖します。

調査は初認の時期のほか、環境選択などいくつかの切り口で実施します。毎日通る家のまわりにいる鳥と違って、キビタキの初認をうまくとらえることができるかどうかわかりませんが、ご協力よろしくお祈いします。

1. 初認時期の調査 標高との関係

早くも5年が経ってしまいましたが、バードリサーチを立ち上げた2004年のことです。大学時代の仲間とさそわれて、富士山麓の青木ヶ原の樹海でキビタキの研究を共同で始めました。といっても、みな自分の研究テーマを別に抱えているので、予備的な調査を少しずつ重ねて行くようなゆっくりとしたものです。調査地は、事務所から高速道路で2時間半ほどのところ。夜、夕飯を食べてから出発し、現地まで車中泊。日の出とともに調査して朝の8時ごろには引き上げて、午前中のうちに事務所に戻ってデスクワーク、といった感じで通ったこともありました。そんな風に何年か通っていて気がついたのですが、どうもこの場所のキビタキの渡来は他の場所に比べて遅いようなのです。でも、繁殖の最盛期には生息密度もかなり高く、環境が悪いわけではなさそうです。なぜでしょうか？考えてみると、この場所は富士山の北側斜面にあたり日照が少なく、標高も1000mほどあります。これが原因じゃないか？と考えたわけです。



キビタキオス第1回冬羽。
[Photo by 神永功]

そうは言っても、あちこちの初認を数人で調査するのは、できそうにありません。そこで・・・、前置きがながくなりましたが、皆さんにご協力いただこうと！調査への参加方法は簡単です。どんなところでも構いません、キビタキを観察したら、ホームページの送信フォームから観察した日とその場所を送っていただくだけです。観察した場所の標高は、

位置情報からこちらでGISを使って調べます。はたして、標高と初認の時期に関係はあるでしょうか？ぜひ、ご協力ください。

キビタキ調査のページ

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kibitaki/

2. 餌を追って上へ下へ オプション調査

青木ヶ原の調査地はそんなに広くはないのですが、林内が開けた広葉樹主体の林と、低木や亜高木が多く入る混交林があります。キビタキは、林内が開けた林よりも後者の林のほうが好きなようです。送信フォームには、林の環境についても選択式の質問項目があります。必須ではありませんが、記憶に残っていたら、林の環境についても答えていただけると、キビタキの環境選択がわかってくると思います。



図. 富士山麓の調査地。

また、同じ送信フォームを使って、もうひとつ別の切り口の調査をします。それは、キビタキのいた位置の地面からの高さの季節変化です。北海道での調査によると、季節の変化に伴い餌となる昆虫や虫が変化して、それにともなってキビタキが採食する高さが変わったそうです。同じことが全国でもみられるかどうか調べてみたいと思います。採食にはこだわらず、観察した時のキビタキがいた高さが2mより下か、上か、といったざっくりとした基準の選択式です。

3. 本当に初認か？ by自動録音レコーダー

今回の調査では、キビタキの初認時期をちゃんと捉えられているかどうか、自動録音ができるレコーダーを使った調査もします。この調査は、キビタキがやってくる林にレコーダーを仕掛けておき、1、2週間に一度、レコーダーの電池を交換してもらうというものです。レコーダーは、内臓の時計で毎朝決まった時間に自動的に録音をしてくれます。キビタキが渡来したら、レコーダーを回収して、いつからキビタキの鳴き声が録音されていたかを調べます。もし、この調査にご参加いただけるようでしたら、高木 (takagi@bird-research.jp)宛にメールでご連絡ください。

レコーダーが4台しかないのです、募集するのは4名です。たくさんの方に手を挙げていただいた時は、調査される場所を加味して選ばせて頂きます。ご連絡お待ちしております！



今回使用するレコーダー。

活動報告

シギ・チドリの採食と干潟

守屋 年史

シギ・チドリ類は、干潟を採食地として利用する傾向が強く、干潟の生態系においては上位に位置し、また個体数の把握も比較的しやすいため、干潟のよい指標生物だといえます。昨年からバードリサーチでは、モニタリングサイト1000のシギ・チドリ類の調査事務局を引き受けていますが、各地の方の調査結果を集計するにつれ、シギ・チドリ類の種数や渡来数が干潟のどのような部分に影響を受けているのか興味が出てきました。シギ・チドリ類の利用頻度の高い干潟とはどのような干潟なのかを解明する足がかりを得るため、まずシギ・チドリ類の採食に注目し、昨年秋から底生生物との関係について調査を開始しました。

1. 試しの調査

昨年秋の渡りの時期(8月～10月)に千葉県のみなばし三番瀬海浜公園に調査区を設置し、シギ・チドリ類の分布と底生生物の分布について試行的な調査を行いました。海浜公園の市川市側には最も干上がったときに沖に向けて約300m、幅約450mの干潟が現れます。底質は砂質～砂泥質です。そこを50m区画の方形区で区切り調査地としました(図1)。シギ・チドリ類の干潟の分布調査は、月に3回程度、大潮の日に干潟が現れてから再び波に隠れるまでの間、時間毎のシギ・チドリ類の位置、種名、個体数、行動、環境を記録しました。また、潮干狩り客やバードウォッチャーなどの人や猛禽類なども記録しました。

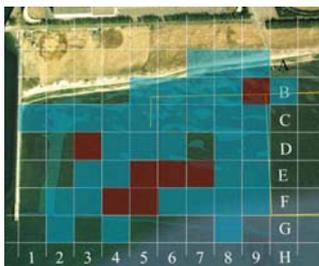


図1. 調査区画とハマシギの分布 (赤は利用頻度が高かった区画)



写真1. コアサンプル。

底生生物調査は、方形区の中から約15カ所の方形区を選び、月に1回、各方形区から直径15cm、深さ25cmのコアサンプル(写真1)を3本取り出し、表層から5cmとそれ以下に分けて2mm目のふるいでふるって底生生物を取り出しました。これらはカニ類、二枚貝類、ゴカイ類などにおおまかに分けて保存しました。

2. シギ・チドリと餌の分布

調査地は昨年8月中旬に青潮の影響を受けたのですが、それ以前の底生生物の表層の分布では、カニ類は陸に近い区画で多く、ゴカイ類は陸から少し離れた区画で最も多く、沖に行くほど減少しました。また二枚貝は沖に行くほど多く確認されました(図2)。主なシギ・チドリ類の分布では、カニ類の多い砂質のA～B区画でキアシシギ、汀線からやや内陸の砂泥質のD～F区画にメダイチドリ、ダイゼ

ン、ミユビシギ、ハマシギ(図1)がよく確認されました。コマツキガニをよく捕食するキアシシギが砂質区画にいるのは納得できるのですが、ゴカイ類

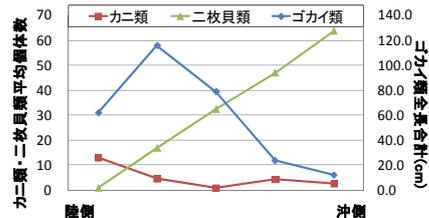


図2. カニ類、二枚貝類、ゴカイ類の分布。

などをメインの餌にしていると思っていた後の4種はゴカイ類が多い陸に近い部分ではなく、沖に近い区画によく集まっているようでした。

3. 餌だけではない、いろいろな要素

主要な餌の分布だけが、シギ・チドリ類の分布に影響を与えているわけではないようです。たとえば、イギリスでの研究ではミヤコドリは大きすぎるヨーロッパザルガイはあまり食べていませんでした。大きな貝には、くちばしが傷ついたり、寄生虫感染の危険があるなどマイナス面が大きいようです(Norris 1998)。私たちから見ると一見よさそうな大きな餌でも一概に良いとは言えず、利用しやすい餌の質も考える必要があります。また、観察では何を食べているのか分かりにくい小さな餌を主食にしていた場合も考えられ、それらの分布も鍵を握るのかもしれませんが。さらに、シギ・チドリが渡るピークの時期に利用しやすい餌が豊富にあるかというタイミングの問題も渡来数を大きく左右します。

そのほか、人や天敵など干潟で彼らをかく乱する要素もあります。シギ・チドリは、ハヤブサやオオタカなど天敵による不意打ちの警戒と餌の分布のせめぎ合いとして中間的な場所で採食するという報告があります(Pomeroy 2006)。陸に近い物陰は不意打ちの危険が高く、ゴカイ類の多い陸に近い区画をあまり利用していないのは、こういった理由と考えられます。また比較的狭い干潟では、人の滞在や活動によって餌を食べる場所の影響を受けると考えられ、人の活動目的別に滞在時間や行動を分析することによってシギ・チドリがどんな反応をしているか解析しています。

4. 今後の調査

シギやチドリ類の渡来には、いろいろな要素が関係しているということがわかってきました。しかし、秋期だけの結果です。まだまだサンプル数が少ないので、今後も調査を継続していきます。将来的には干潟の価値を高めたり、再生するための基礎的な資料になればよいと思っています。

今年も、みなばし三番瀬海浜公園でふるいをふるっていると思うので、気軽に声をかけて下さい。

● 引用文献

Pomeroy, A.C. 2006. Tradeoffs between food abundance and predation danger in spatial usage of a stopover site by western sandpipers, *Calidris mauri*. *Oikos* 112:629-637
 Norris, K. 1998. The functional response of oystercatchers (*Haematopus ostralegus*) searching for cockles (*Cerastoderma edule*) by touch. *J. Anim. Ecol.* 67:329-346.

研究誌 Bird Research よい

森林におけるスポットセンサス

バードリサーチは、環境省のモニタリングサイト1000の陸生鳥類の調査のお手伝いをしていますが、最近、調査上の問題となっていることがあります。その1つが調査コースの林道が使われなくなって藪が茂り、藪を掻き分ける音でセンサスに支障がでるといことです。ヒグマと遭遇する可能性のあるコースでは、危なくて、自動車からあまり離れたくないという意見もありました。その様な問題を軽減するために、ラインセンサスからスポットセンサスに切り替えようと、その精度の検証をしたのがこの論文です。

平野敏明・植田睦之・今森達也・川崎慎二・内田博・加藤和明・金井裕。2009. 森林におけるスポットセンサスとラインセンサスによる鳥の記録率の比較。
Bird Research 5: T1-T13.

スポットセンサスという方法を聞いたことのない人もいるかもしれませんが、調査地点を決めて、その周囲に飛来する鳥を記録する方法です。猛禽類や水鳥の調査でよく行なわれる定点調査の森林の鳥版とってください。アメリカではラインセンサスよりもよく使われています。

調査の結果から、スポットセンサスとラインセンサスの記録率を比べると、スポットセンサスの方が短い時間で多くの種を記録できることがわかりました。歩くことで広い範囲をカバーするラインセンサスの方が、そのうちの一部で調査をするスポットセンサスより多くの鳥が記録されそうに思いますが、1点に留まって、静かにじっくり鳥を探せる点でス

ポットセンサスの方が遠くの鳥や目立たない鳥を発見しやすいという利点が大きいです。また、記録個体数を比較するとラインセンサスで多いところは、スポットセンサスでも多いという正の相関があり、個体数のモニタリングにも十分使えそうだということがわかりました。



森の中のエナガ。[Photo by 福永杏]

この成果を基に今年から、モニタリングサイト1000ではスポットセンサスが採用されています。概ね好評ですが、「立ち止まっていると蛭がよってくる」とか「歩いていないと寒さが身に沁みる」といった苦情も来ています。さて今度はどんな対策を考えましょうか？

【植田睦之】

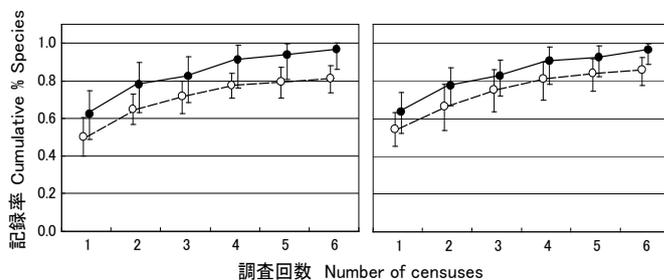


図. ラインセンサス(白抜き○)とスポットセンサス(黒●)の種の記録率と調査回数との関係。スポットセンサスの方が早く記録率が高くなり、かつ最終的な記録率も高いことがわかる。

図書紹介

日本の希少鳥類を守る

山岸哲 編著 / 京都大学学術出版会 定価 3,500円 (税別)

京都大学学術出版会から「日本の希少鳥類を守る」という本が出版されました。希少鳥類の保護活動を実際に行なっている方々が執筆した本で、トキ、アホウドリ、ヤンバルクイナ、シマフクロウ、シジュウカラガン、ライチョウ、オオワシ、チョウゲンボウ、ブッポウソウ、タンチョウ、コウノトリの保護活動について、その歴史や実際を読むことができます。詳細は下記のサイトをご覧ください。

京都大学学術出版会 書籍紹介ページ
<http://www.kyoto-up.or.jp/book.php?id=1596>

● 書籍の割引販売のご案内

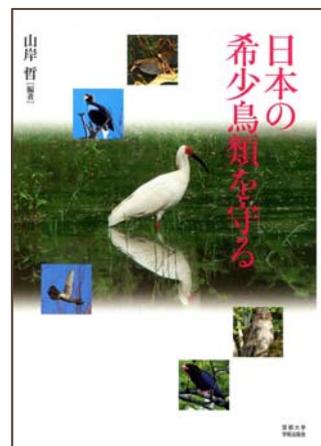
この本のコラムの部分をバードリサーチで担当したこともあり、バードリサーチの会員の皆様は、本書を割引価格で購入することができます。

通常価格3,675円のところを、なんと(というほどは安くありませんが)、3,100円(本体2,940円+送料160円)です。さらに、複数冊ご注文いただいた方には、送料分が多少お

安くなります。購入を希望される方は、下記のホームページからお申し込みください。4月10日までに申し込みいただいたものを、まとめて注文、発送しますので、お届けは4月20日くらいになるかと思えます。

4月10日以降のご注文にも対応しますが、その場合には京都大学出版会から直接送ってもらうので、あちらの梱包料、送料が必要になります。梱包料、送料込みで3,290円とちょっと高くなってしまいますので、ご注文はお早めに。

【植田睦之】



バードリサーチの書籍注文ページ
http://www.bird-research.jp/1_event/book.html

ヤマセミ 英: Greater Pied Kingfisher 学: *Ceryle lugubris*

1. 分類と形態

分類: ブッポウソウ目 カワセミ科

全長: 41-43cm 最大翼長: 179-196mm
 尾長: 106-124.5mm 全嘴峰長: 63-70mm
 ふ蹠長: 12-15mm 体重: 240-305g
 ※ 全長は (del. Hoyo. 2001), その他は (清棲 1978) による。

羽色:

雌雄ともに頭、また体と翼の上面は白色と黒～灰色のまだら模様。目先には白いスポットが、目の下には狭い三日月状に白い部分がある。額と冠羽は長く直立しており、冠羽のまだら模様の羽の中には、真っ白な短い羽が部分的に混ざる。顎と腹は白い。尾羽は黒地に白い横線が6～8本入る (Fry et al. 1992)。雌雄ともに顎線と胸部に黒い斑点を持ち、オスはこの部分に黄褐色または赤褐色を帯びるが、メスは帯びない。また、オスの下雨覆い(翼の内側)は白いが、メスの下雨覆いは黄褐色または赤褐色である。



写真1. ヤマセミのオス(上)とメス(下). [Photo by 内田博]

鳴き声:

ケレッ、ケレッ、と鋭い声で鳴く。飛びながらケレケレケレ、と鳴くこともある。繁殖期に巣穴を掘る際には、おもにオスがケレレレレ、と大きな声で頻繁に鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

本州、四国、九州に生息する。北海道や千島列島南部に生息するものは亜種エゾヤマセミ (*C. l. pallida*) とされる。また、北東アフガニスタンの東部からカシミール、ネパール、北東インドからインドシナ半島、中国の南部から北東部、ミャンマー南部、タイ北西部、ベトナム一帯に生息するものは *C. l. guttulata* とされる (del. Hoyo et al. 1992)。

生息環境:

主には山地の溪流や湖沼に生息するが、河川中流域でも繁殖が見られる。本種の生息には、好適な採食場所となる瀬と淵で構成された河川、採食時に止まり場となる河畔林、営巣可能な露出した土の崖が重要な条件となる。

3. 生活史



繁殖システム:

繁殖期は3～8月。一夫一妻制。ひとつがいあたりの行動圏は、川に沿って3～7km (石部 1997)。

巣:

土質の崖に横穴を掘って営巣する。巣穴の入り口は上に尖る五角形をしており、大きさは縦11～18cm, 横10～18cm程度 (N=5, 西村 1979)。入り口から最奥部までは0.8～1.6m (石部 1997)。造巣には14～20日を必要とする (中村・中村 1995)。河川に面した崖だけではなく、河川から1km以上離れた崖も利用し、高さが2mもしくは3m以上の急傾斜の崖を好む傾向がある (西村 1979, 石部 1997)。



写真2. 千曲川のヤマセミの巣穴。崖の高さは約5m.

卵:

通常は4～6卵。卵の大きさは約4.0×3.2cm程度で、色は白く無斑 (柿澤・小海途 1999)。

抱卵・育雛期間:

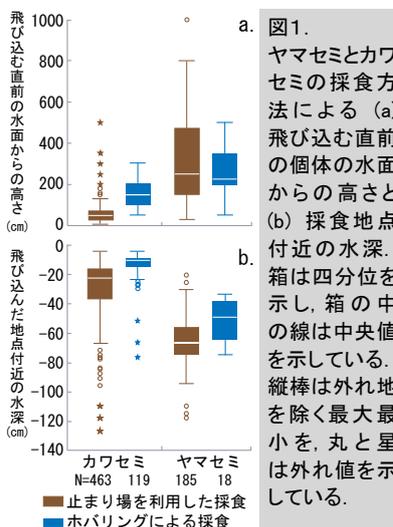
抱卵期間は約24日、育雛期間は約35日。抱卵、抱雛ともに雌雄で行う (石部 1997)。

4. 食性と採食行動

採食では、岸に生えた高木の枝や流れの中の岩、時には水面から10mの高さの橋の橋脚などを止まり場として魚を探し、水中に飛び込んで捕える。またホバリング (停空飛翔) から水中に飛び込んで採食を行うこともある。長野県を流れる千曲川の中流域における繁殖期の調査では、採食方法として止まり場を利用する割合は90.0% (N=209) であり、ホバリングを利用するよりも高かった (Kasahara & Katoh 2008)。採食行動による採食成功率の比較では止まり場を利用した場合の方がホバリングを利用した場合よりも魚を捕らえる率が高かった (止まり場利用: 70.7%, N=188, ホバリング



写真2. 水中に飛び込み、魚を捉えたヤマセミのメス.



利用: 50.0%, N=18)。同所的に繁殖が見られるカワセミと採食時に飛び込む高さ、採食場所の深さについて比較したところ、採食方法によらず、ヤマセミはカワセミよりもより高い場所から水中に飛び込み、より水深の大きい場所で採食する傾向が見られた (図1, Kasahara & Katoh 2008)。

また、採食場所の比較を行ったところ、ヤマセミの採食が見られた場所は流れが比較的速い場所であった一方で、カワセミの採食が見られた場所は流れが比較的穏やかな傾向が見られた。二種の巣内育雛の後期に巣に運ばれる食物をビデオ撮影によって調査したところ、ヤマセミではウグイが最も利用され、続いてオイカワが利用された(図2a)。また、アユ、コイやフナの仲間、ドジョウ、アカザやナマズなども巣穴に搬入された。カワセミではオイカワが最も利用され、続いてウグイ、そしてドジョウも高い割合で利用された(図2b)。利用された食物の推定体長の平均はヤマセミで12.8±2.5cm(N=304)、カワセミで、7.5±1.5cm(N=620)であり、体サイズの大きいヤマセミ(カワセミの全長は約16cm, del. Hoyo *et al.* 2001, 体重は18~36g, 清棲 1978)のほうを利用する食物は大きかった(Kasahara & Katoh 2008)。

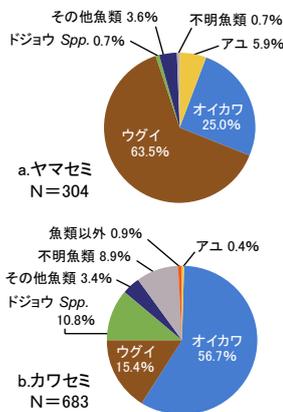


図2. ヤマセミ5巣、カワセミ7巣から得られた食物内容。利用された魚の種類は類似しているが利用の程度は異なっている。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 食物ニッチの分離によるカワセミとの共存

ヤマセミは河川の上流域に生息し、カワセミは中、下流域に生息するとされているが(中村・中村 1995)、千曲川の中流域では二種の同所的な生息と繁殖が見られる。二種とも食物資源に対して日和見主義であるとされているが(Wanink & Goudswaard 1994, Campos *et al.* 2000)、利用する魚のサイズはほぼ一定であり(Campos *et al.* 2000)、同様の傾向は千曲川でも観察された(Kasahara & Katoh 2008)。カワセミとヤマセミが育雛期に利用する魚は種類よりもサイズによって決定されると考えられる。千曲川における調査から、ヤマセミとカワセミの間では利用する魚の大きさ、採食場所が異なっていることがわかった。また、二種の間に直接的な争いは見られず、種間の行動圏は重複していた(Kasahara & Katoh 2008)。千曲川では、二種の体サイズに由来した食物ニッチの分離が二種の共存を可能にしていると考えられる。

● 巣内育雛期に釣り人から受ける影響

ヤマセミは造巢から雛の巣立ちまでの期間が2ヵ月半余りと長い。千曲川中流域では本種の造巢が3月下旬~4月上旬に開始されるため、6月下旬に解禁されるアユ釣りと、本種の巣内育雛時期が重なる場合がある。アユ釣りの解禁後では、釣り人の活動が盛んになると親個体による巣内雛への食物の搬入回数が減少する傾向(図3)、また搬入された魚が小型化する傾向が見られた(笠原・加藤 2007)。このことは巣の近くの釣り人の存在が親個体の巣への接近を妨げている可能性、また多くの釣り人が川に存在するこ

とによってヤマセミの採食場所の利用が妨げられている可能性を示唆している。ヤマセミは営巣環境の減少から多くの都道府県において生息数の減少が懸念されている。この種の地域的な生息数の維持には、好適な生息環境の維持とともに、繁殖に対する人間のレクリエーションの影響を緩和することが重要であると考えられる。

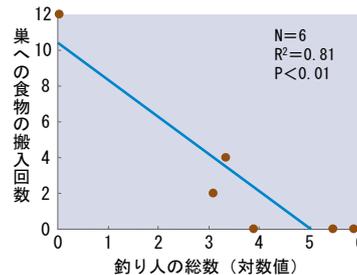


図3. 8時~16時におけるヤマセミの巣への食物の搬入回数と観察された釣り人の総数(対数値)との関係。釣り人の数が増えるほど日中の搬入頻度が低下する傾向が認められる。

6. 引用・参考文献

Campos, F., Fernández, A., Gutiérrez-Corchero, F., Martín-Santos, F. & Santos, P. 2000. Diet of the Eurasian kingfisher (*Alcedo atthis*) in northern Spain. *Folia Zoologica* 49: 115-121.

del. Hoyo, J., Elliot, A. & Sargatal, J. 2001. Handbook of the Birds of the World. Vol. 6. Mousebirds to Hornbills, Lynx Editions, Barcelona.

Fry, C.H., Fry, K. & Harris, A. 1992. Kingfishers, bee-eaters, and rollers. Princeton Univ. Press, Princeton.

石部 久. 1997. ヤマセミ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲(編) 日本動物大百科 第4巻 鳥類II: 48-50. 平凡社, 東京.

柿澤亮三・小海途銀次郎. 1999. 日本の野鳥 巣と卵図鑑. 世界文化社, 東京.

笠原里恵・加藤和弘. 2007. ヤマセミ *Ceryle lugubris* の育雛に釣り人の存在が与える影響. *日本鳥学会誌* 56: 51-57.

Kasahara, S. & Katoh, K. 2008. Food-niche differentiation in sympatric species of kingfishers, the Common Kingfisher *Alcedo atthis* and the Greater Pied Kingfisher *Ceryle lugubris*. *Ornithological Science* 7: 123-134.

清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑. 講談社, 東京.

中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編). 保育社, 大阪.

西村雅彦. 1979. カワセミとヤマセミの造巢場所選択について. *山階鳥類研究所研究報告* 11: 39-48.

Wanink, J.H., & Goudswaard, K. 1994. Effect of Nile perch (*Lates niloticus*) introduction into Lake Victoria, East Africa, on the diet of Pied Kingfishers (*Ceryle rudis*). *Hydrobiologia* 279/280: 367-376.

執筆者

笠原里恵 東京大学大学院農学生命科学研究科 緑地植物実験所

修士課程から長野県の千曲川をフィールドに河川やその周辺で繁殖する鳥類の研究を始めました。複数の種を対象とした調査を通して、河川で繁殖する鳥類がどんな環境を必要としているのか、また鳥類の目を通しての河川らしさの維持や回復について検討していきたいと考えています。



参加型調査

季節前線ウォッチ 携帯電話からも情報送信が可能に！

植田 睦之・神山 和夫

「家に帰ってから情報を送信するのはめんどくさい」。以前からいただいていた、季節前線ウォッチの参加者からの意見に、やっと答えることができました。携帯電話での情報送信ができるようになりました。

どこかで季節前線ウォッチの対象種を初認されたときは、その場所で携帯電話から以下のホームページにアクセスしてください。QRコードリーダーの機能がついた携帯をお持ちの方は、QRコードでホームページのURLを読み込むこともできます。携帯のお気に入りサイトに登録しておく便利です。

季節前線ウォッチ for GPS携帯
<http://db.bird-research.jp/kz/>



季節前線ウォッチの携帯用サイトのトップ画面。



アクセスして、画面の指示に従って進むと、携帯に搭載されているGPSが携帯のある場所の緯度経度を求め、初認情報と共に位置情報も送ってくれます。

最近の携帯電話は、どの機種でもGPSが搭載されていますが、古い携帯電話をお使いの方の中には、GPSが搭載されていないものもあります。その場合はこの送信ページを利用できません。申し訳ありませんが、ご了承ください。

また、携帯電話用の季節前線ウォッチの結果のページもつくりました。電車の中など暇な時間にこちらから、結果をご覧くださいいただけます。

季節前線ウォッチ結果報告 for GPS携帯
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kz/



ちょうど、ツバメの飛来がはじまった時期です。軒先の巣にツバメが来ているのをご覧になりましたら、この携帯電話のページあるいはパソコン用のホームページから情報をお寄せください。よろしく願いいたします。

季節前線ウォッチ パソコン用のページ
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kisetu/index_kisetsu_chosakekka.html

図書紹介

田園の魚をとりもどせ！

高橋清孝 編著 / 恒星社厚生閣 定価 2,900円 (税別)

野鳥のほとんどが水環境を利用します。特に水鳥にとって水は切っても切れない関係です。私は1年ぐらい前からバードリサーチのカワウの調査を手伝っていますが、調査をしながら「カワウと一緒に、エサとなる魚の生息状況も調査できれば面白いのになあ」とよく話しています。

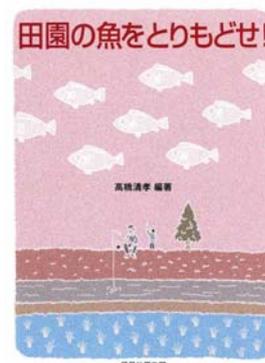
本書は、水田や湖沼などに生息する魚にスポットを当てて、魚の種類や生態、各地で起きている水環境の破壊問題とそれに対する復元活動などが紹介されています。たとえば、農業の衰退や農薬の使用、外来種の侵入などの問題により、日本に古くから生息している魚たちにどのような影響がでているのか、ニッポンバラタナゴやメダカなどの絶滅が心配されている魚たちのために今後どのようにしていけばよいのか、事例をもとに詳しく解説されています。また、兵庫県でのコウノトリの生息環境復元についての話や、宮城県伊豆沼でのブラックバス侵入前と侵入後、駆除

開始後での水鳥の個体数変化についてなど、鳥の視点からも面白く書かれています。

全体的に難しい専門用語などはほとんどなく、魚の知識のない僕でも抵抗なく読むことができました。

6章の「だれでもできる魚の調査方法」では、比較的簡単にできそうな調査の仕方が載っていました。定置網や地引網などは、カワウのいるような河川で調査するのに適していそうです。そのうちバードリサーチでも、魚の調査をする日が来る・・・かも知れません。

【本山裕樹 バードリサーチ委託調査員】



バードリサーチニュース 2009年3月号 Vol.6 No.3

2009年3月25日発行

発行元： 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者： 植田睦之

編集者： 高木憲太郎

表紙の写真： タシギ